
タラスクス～朝の病名～？ - 2

鳥海きりう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タラスクス〜朝の病名〜？ 2

【Nコード】

N 8 7 9 9 P

【作者名】

鳥海きりう

【あらすじ】

最後の夜が始まる。信じる者達に裏切られ、生死の淵を彷徨う朝を救ったのはあの少女の微笑みか、いついかなる時も彼女の傍を離れなかった彼の献身か。何かを察したように全ての灯を消した聖都の街並みとその上に広がる満天の星空に、朝は今夜の勝利を誓う。二ズヘグが真の力を解放し、腕を切られ、脚を切られ、口から血反吐を吐こうとも朝とタラスクスは諦めない。神耶朝の最後の戦いに、君の熱い勇気を分けてくれ——とは言わない。ただ、彼女達が信じた愛の形を、咎める事無く見守って欲しい。

？・もしもあなたが愛する人に打たれたら

十

久し振りに、ぐっすりと眠った。

小屋に入ったのは夕方頃だったけど、起きたらもうすっかり夜になっていた。周囲は真っ暗で、天頂にだけ星が瞬く。「メイドさん……？」この期に及んでも名前を知らないの、敬称で呼ぶ。

彼女は、外にいた。ガラス戸の向こう。芝が生い茂る丘の上に立ち、暗い空か、眼下の街か——どちらかわからないけど、何かを見つめている。

私も小屋の外に出て、彼女に声をかけた。「行くの？」

「——気づいてたんですか」

「途中からね。不自然すぎるもの」
メイドさんが、半分だけこちらに振り向く。暗くて表情は分からない。「メイドさん。貴女はどうして戦うの？」

「知りません。国《うえ》に訊いて下さい」

「ここでは止そう。人が居過ぎる。相手になるから、場所変えよう」
「相手に？——ならないですよ。残念ですけど」

「こないだと同じだと思わないで。ナメてかかるなら、容赦は」
そこまでしか、言えなかった。

突然襲った苦痛と眩暈に、私は思わず膝を突く。「——そういう、こと……！」理解はした。でも納得いかない。一体どこで？

「気づくのが遅かったですね。——まあ気づいて私をどうにかしたところで、結果は変わらないですけど」

「いつ——！？ 毒を盛るような時間的余裕は無かったはず！」

「私は、ね」

彼女が意味ありげに笑う。——私は？

気がついた。クレープ屋。絶対あれだ。あれしかない。畜生。

彼女の言う通りだ。気づくのが遅すぎた。

こみ上げてきたものを嘔吐する。吐瀉物は、紅かった。

メイドさんが、私の傍に座り込む。「これで、終わりです」

「私のニーズヘグで聖王宮は壊滅。タラスクスは最後まで出勤せず、全て終わった後にまんまと敵に出し抜かれて殺された貴女の遺体が発見される。騎士と聖王の威厳は地に落ち、やがてそのために命を懸けようと思う人間はいなくなる」

「まだ——まだヤノシユがいる！ 貴女の思うようにはさせない！」

「ヤノシユ卿も来ません。ラタスク卿もじきにいなくなる。騎士が三人も揃っていないながら、誰も王と民のために戦おうとしなかった——それがこの国の限界です。と、未来の教科書には書かれるでしょう」

「え——？」

待つて。それは、つまり「嘘——嘘！ ラトが、私達を裏切るはずが無い！」

「それを確かめる術も時間も、もう貴女にはありません」

メイドさんが立ち上がり——背筋を伸ばし、敬礼した。「スコルピア連合陸軍特務機関兵務局分室、シエル・レトナンド特尉です。お会いできて光栄でした」

「……シエル……」

また、血を吐いた。「下士官風情が出過ぎた事を申しました。先程のことは忘れてください。貴女を騙すための偽計です」

私はシエルの目を見た。苦痛を堪えてじっと見上げた。

「どうか、いい夢を」

シエルが背を向け、歩き出す。私は力尽き、顔を地面に伏した。遠くに地響きが聞こえる。近づいてくるはずのそれが、徐々に遠のいていく。

どうやら私は、死ぬらしい。

苦痛と喀血にのたうちながら、私の意識は緩慢に混濁していった。

†

私は真面目な人間じゃない。

でも、自分が真面目な人間じゃないことは知っている。

それを知った上で、自分が一日にできる仕事量を計算して、計画を立てるぐらいはできる。ていうか、嫌でもできるようにする。ならないと本当に仕事回らない。仕事回らないとスケイドに説教される。あいつの説教は優しいけど長い。

でも、自分が不真面目なのを知って計画を立てると、たまたま調子良かった時は、逆に時間が余ったりする。

今日も意外と早く午前中の予定が片付いた。もちろん全部終わったわけじゃないけど、残りは午後からで充分間に合う。かといって気晴らしに外へ出る時間は無い。もうすぐスケイドが自分の受け持ちの書類を私のところに持ってきて、それを一通り確認したら「そろそろランチに致しましょうか」と来る。外へなんか行ったら変なところで掴まらないとも限らないし、時間通りのお昼を食べ損ねるかもしれない。

時間が余ってて、かといって執務室を出るわけにはいかない。

こんな時は――

居眠りに限る。

「あーしーたーさん！」

黒檀の机に涎を垂らしながら寝ていた私は、そんな声と容赦の無いひっぱたきで目を醒ました。すごく痛い。ママにもぶたれたこと無いのに。「痛い……」

「何寝てんですかこんないい天気の日に」

「いい天気だから寝てんじゃない」

「よだれ拭いてください」

「ん――あれ？ 小衣？」

磨き抜かれた平手で私を叩き起こしたのは、前の仕事で一緒だった春日小衣だった。――なんでここにいらっしゃる。私の国とヴォーディガン公国は親政府を挟んで正反対の位置にある。買物物ついでにフラツと寄れる距離じゃない。

「なんでいるの？」

「なんでって。朝さんが呼んだんじゃないですか」

「？」

「見学に来る？ って」

「……ああ」

そうだった。見せてあげるんだ。小衣に。

私のこの特技を「見たい」なんて言ってくれる人は、久し振りだったから。「さあ、行きましよう、朝さん」小衣が私に手を伸ばす。

「うん」

手を取り、椅子から立ち上がる。笑う小衣が私に背を向け、走り出し――

私だけが、コケた。「?」「あれ」

「どうしたんですか？ 朝さん」

「や、ごめんね。何か急に」

そこまで喋り、息が詰まる。「気分が」立ち上がろうとして、また倒れる。

「そうじゃなくて」

「え？」

「その、血」

倒れたまま、周囲を見回す。血。ドス黒く広がる血溜まり。それが徐々に大きくなり、私を飲み込んでいく。

「朝さん――」

小衣の声が遠い。私は血の海の底に沈んでいく。声を出そうと口を開いても、むせ返るほどの血の味しかない。

嫌だ。助けて。

死にたくないよ、小衣――

+

「よお」

「…」

「いやあ、フラれたな」

「…」

「しかし、この展開は悪くない。あいつは完全にお前を殺せたと思ってる。こっちに背を向けてるところへ先制攻撃をかけ、あの厄介なコーキング・ランチャーの発射管を潰すんだ。それができれば、たとえ盾が無くても互角以上に戦える」

「…何、それ」

「？ 俺の作戦に何か穴でもあったか？」

「違うわよ」

いつの間にか私は仰向けに寝かされていた。むくりと起き上がる
と、胸元がはだける。「…」

確認する。シャツの釦《ボタン》がいくつか外れている。袖が
二の腕辺りまでまくられている。ベルトが少し緩い気がする。

私は腕と肩を回して調子を確認し、渾身の力で司に拳を打ち込んだ。

「何しやがる！」

「黙れクソ野郎！ 私が死に瀕してる間に何してくれてんのよ！」

「お前こそ馬鹿か！ 釦を外したのは氣道を確保するため、袖をまくったのは解毒剤を注射するためだ！」

「ベルトは！ 介抱するついでに私のおしりを愉しんだとでも言うの！」

「知るかボケ！ ベルトなんざ触ってねえよ！ オノレが寝ぼけて緩めたんじゃないのか！」

言われて思い出してみる。——私だ。寝る時はいつもベルトを少し緩めて寝ている。今日はシエルがいたから止めておこうと思ったのだが——たぶん、クセでやってしまったんだろう。

「…ふん。証拠も無いのによくそこまで言い張れるものね」

「…今日という今日は本気で後悔したぜ。お前なんかあのままくたばりや良かったんだ。ミジメなフラれ女のままでな」

「そうそう。だからなんであんなここにいのよ。解毒剤って何」

「金の臭いがしたからさ。今回はかりは分が悪いかと思ったが、聞けば今夜にでも敵が来るかもしれないっていうじゃねえか。で、慌てて来てみりや案の定、お前がいかかわしいメイド服の女に引っかってやがる。解毒剤はまあ、俺の七つ道具の一つだ」

「…シエルはいかかわしくないよ」

「何だと？」

私はおしりを払い、立ち上がる。「こつ恥ずかしいメイド服なんか着てお前に近寄り、こんなところへ連れ込んでくだらない文句で懷柔し、毒を盛って悠々と逃げ果せた女がいかかわしくなくて何なんだ？ 毒で脳ミソまでやられたか。あいつはお前の敵なんだよ。さっさとしてプチ殺してこい！」

「…シエルは、殺せないよ」

「お前事の重大さ分かってんのか！ 殺されかけたんだぞ！ 俺が

解毒剤打たなきゃ死んでたんだぞ！？ 見ろよこの地面の水溜りを！ 自分で吐いた血に汚れた自分のザマを！ここまでやられて躊躇うのか！？」

「…躊躇わない」

「だったら！」

「確かにあんたがいなきゃ、私はここで死んでた。それはわかってる。感謝もしてる。——でも、私がここでこんなザマになったのは私の落ち度。私に落ち度が無いとしたら、不可避の運命だった。——でも、生きてた。たまたま生き残った。だから、私はそのたまたま拾った命を、どう使うか考えたい」

「どう使う？ 決まってるんだろ。まずはお前に狼藉を働いたあの女に落とし前をつけさせるんだよ」

「…」

街の方を見る。彼方に地響きが聞こえる。こうしている間にも罪無き民草の家や財産が破壊されていく。時間が無い。これ以上の問答は無駄だ。「…行ってくる」

「おお。その意気だ。頑張れよ。遠慮無しにコロガしまくってこい」

「あの竜を倒して、彼女を——シエルを、私のメイドにする」

「そうそうその調子だ。やっといつもの調子が——何！？ 何だとい？」

「彼女の言葉は、嘘かもしれない。——でも、嘘じゃないかもしれない。彼女の本当の気持ちを確かめる。このままじゃ別れられない。殺せない」

「…馬鹿野郎！ ものの見事に騙されやがって！ あいつは軍の中でも特別に訓練された工員なんだぞ！？ お前死ぬぞ！？ そんな半端な気持ちで行ったら、今度こそ殺される！」

「馬鹿かもしれない。でも私は、もう一度——もう一度だけ、彼女を信じたい」

司を振り返る。——まだ何か言おうとした顔が、そこで止まった。「司」

額に口づけた。実は司は私よりちよつと背が低い。「ありがとう。今回は本当に助かった。だから素直にお礼しとく」

「…死ぬ気か…?」

司が呟いた。思わず笑う。——それもいいかも知れない。彼女に思いのたけを総て告白して、刺し違える。それはきつと、それはそれで、幸せな死に方なんだろうと思う。戦いと復讐のためだけに生きてきた女騎士が、最後は愛のために殉じる。なんか小説っぽくていいじゃない。

——でも、多分そうはならないだろう。

「行ってくる」

宣言し、正面に向き直る。決意すると力が沸いてくる。また夜が始まる。竜を倒し、シエルを手に入れる。今までの夜は憎悪か倦怠しか感じなかったけど、今夜はもつと大きな感情が私の心を占めている。

だって、あそこにはシエルがいる。

きつと、最高の夜になる。

+

すでに攻撃が始まっている以上、一刻も早く現場に急行する必要がある。

時間的制約が無ければ、最も効果的なのは徒歩で敵の足元まで行つてタラスクスを召喚、最初の不意打ちでコーキング・ランチャー発射管を攻撃、という作戦になる。しかしこれはダメだ。これは要するに街を囲にするということだ。仮に勝てても、クレームの便りが私のデスクの上で山となるだろう。だいいち徒歩で現場に向かうよりも、タラスクスで一回ジャンプするほうがはるかに早く現場に到達できる。

なので私は、丘を少し降りた森の中でタラスクスを喚んだ。コクピットに座り、敵を探しながら弓を構える。思い出す。確

か敵のコーキング・ランチャー発射管は肩にあった。大型の肩部装甲が丸ごとミサイルポッドになっているのだろう。肩を破壊すれば、敵の戦力を大きく減じることができる。

いた。敵は聖都中央幹線道路を通過している。障害物が最も少なく、敵——ニーズヘグの巨体を最も迅速に聖王宮へ運べるルートだ。胸が、じんわりと熱くなった。

それは、最も街に被害が出ないルートでもある。「……シエル」
呟き、矢を番えた。MSSS—《手動狙撃補助システム》を起動し、ターゲット・スコープを上部コンソールから引き下ろす。メインモニター連動開始。鏃は通常徹鋼鏃。内部から破壊する目的なら衝撃信管式炸裂鏃も効果的なのだが、今回は炸裂しないほうが、もっと面白い効果が望める。

——聖王宮へ向かっていたニーズヘグが、立ち止まった。「お、偉い。ちゃんとリーダー見てるんだね」こちらは手動狙撃モードなので、照準波は出ていなかった。つまり向こうのコクピットでは、警報は鳴らなかったはずなのだ。

ニーズヘグが振り返る。私は引き続きスコープを覗き続ける。発射管は——片方の肩に三門。前回撃ってきたのが十八発だったから、少なくとも一門三連射はできるわけだ。まだ発射管は閉じている。開閉ギミックがあるのだから当然他よりも脆弱、と考えたいところだが、前回の失敗もあるのでここは慎重を期す。

つまり、敵がミサイルを撃った瞬間、タイミングを合わせて狙撃しなければならない。

「……神弥、卿……？」

そんな声が聞こえてきた。すごく言いたいことはたくさんあるが、今はスコープに意識を集中する。

「ど、どうして……？」

驚くんならついでにコーキング・ランチャーの発射管を開けて欲しいのだが、それを普通に頼むわけにもいかない。かといってこのままでも事態が進まない。

なので、少し話すことにした。「シエル」

「ありがとう。名前教えてくれて」

「う、嘘……あの毒をあれだけ飲んで、生きていられるはず無いのに——」

「……えーと」

……どうしよう。いきなり困った。

言うことが無い。

いや、言いたいことは山ほどあるんだけど、何を言えばいいのかわからない。だいいち今は一応戦闘中なんだから、あまり的外れなことを言い出しても呆れられるだけだ。

——こんなことを考えるあたり、やっぱり私は年を取っているんだと思う。「はあ……」

そう、発射管。発射管を開けて欲しいのだ。それはつまり彼女に攻撃する気にさせないといけないわけで、つまりは挑発する必要があるわけだ。

——何にせよ、黙っているのが一番彼女を困らせることなんだろう。

と、自分を納得させる。「シエル」

「よくも私の純情を踏みにじってくれたわね」

「え、あ——」

「貴女を騙すための偽計です、だ？　よくもその可愛いお口からそんな下劣な言葉が出てくるものね。ギャップ萌つてのが世の中にはあるらしいけど、あんたのそれはただ心根が卑しいだけよ。あんたみたいなでもスコルピア連邦では尉官の地位がもらえるのね。人を騙してしか生きられない卑しいクソ貧民の分際で、よくもこの由緒正しき聖ドレイクの土を踏めたものだわ。誰がそんなこと許可したんだコラ！」

「ひ——！？」

「ひじゃねえんだよコラアバズレ！　今さらびびって泣いて謝れば済むと思ってるの！？　人ナメンのもたいがいにしる！　悪いと思っ

てんならそこから出てきて直れ！ 面倒だろうから自決はしないでいい！ 私が素っ首叩き落してやる！ それができないならトリガーを引け！ モニターの中央に私を捉えて照準を合わせろ！ 私が私が望むケジメだ！ あんたが敵に選んだのはそういう女だ！」

——ニーズヘグは動かない。やりすぎただろうか。「……」いいさ。このまま私を憎んでくれればいい。私への怒りと憎しみだけになつて牙を剥いたその瞬間を、私は決して見逃してはならない。

「……」

ていうか、ほんととはもつと違うこと言いたかつたんだけど。「……」

？「……」

「……ごめん、なさい……」

「……」

半泣きのその声を聞いて、私はすっかり呆れ返った。彼女にではなく、自分自身に。

……超やりすぎた。憎ませるところか泣かしてしまった。

しかし、このままグダグダなままで夜が明ければ、彼女と戦わずに済むのだろうか。「……」くすりと笑う。ちよつと不完全燃焼だけど、たまにはそんなのもいいじゃないか。と一瞬思う。

一瞬思った、その瞬間だった。

ニーズヘグの右肩が砕け散り、その巨体が轟音を上げて道路に倒れこむ。「！？」

遅れて、シエルの恐怖に塗れた悲鳴が聞こえた。「シエル！」思わず叫ぶ。すぐさまタラスクスを走らせて駆け寄りたかったが、勘が私を踏み止まらせる。

何かが、いる。

一撃でニーズヘグの堅牢な装甲を破壊する何かが、どこかに隠れている。

「ごきげんよう」

「！？」

突然、モニターが紫に覆われた。思わず後方回避を入力しそうになったが、ぎりぎりのところで腕を止める。見覚えのある紫。聞き覚えのある声。思索の紫外套《マント》。

「……少し揺れましたよ。驚きすぎです」

「……戦闘中に、目の前に出てくるからですよ」

紫の帳が降りた時、そこにいたのはアストレア・フォロン・ラタトスクだった。いつの間どこからどうやって登って来たんだか、タラスクスのメインカメラの前——つまり胸部装甲のちよつと出張った部分に立っているらしい。命に関わるほど足場が悪いはずだが、ラタトスクは顔も身体も小揺るぎもしない。

——ていうか。「ラタトスク卿」

「はい？」

「間違つてたらすいません——貴公とヤノシユ卿が、敵と通じているという情報があるのですが」

「——」

それを聞いて、ラタトスクは——くいつと眼鏡を押し上げ、笑った。「事実です」「はい!？」

「だからこそ、敵はこの作戦を決行した。私一人ではインパクトに欠けるので、ヤノシユ卿にも名前を貸して頂いたのです。今回の作戦で敵は虎の子の竜を一機失い、さらにこちらには最新技術の情報が、現物として残る。悪くない戦果です」

「——」

しかし、その戦果を得るために引き換えにしたのが——あ。「テユール・シティが陥ちたのも、出来レースですか？」

「陥ちてはいません。実際に攻撃を受けたのは本城のみで、街にも外壁にも被害は出ていません」

「——」

「ついでに言うと、ここもそうです」

「え、マジで!？」

「周辺の避難はすでに完了しています。陛下のお許しも出ています。」

今夜一晚だけ、この聖都は貴女のためのリングです」

「――」

私が呆気にとられていると、ラタスクは正面に向き直り、一つため息を吐いた。「――あの敵兵も哀れなものです。命まで取るつもりはありませんが、この国にいれば一生賊扱い。故郷に帰れたとしても、果たして居場所があるかどうか――」

そうだ。シエル。

彼女にはもう逃げ場が無い。おそらくどこかにいたであろう後方支援部隊も、私に毒を盛った潜入班も、すでにラタスクの手の中が始末しているのだろう。シエルは今敵中で孤立している。地中を潜って全力で逃げたとしても、エネルギーや食料がどこまで保つか。地上に出れば他の騎士団が黙ってはいない。私だって逃がしてあげるわけにはいかない。だいたいそこを押してどうにか逃げ切ったとしても、ろくな戦果も挙げられずに撤退してきた彼女を本国が受け入れるかどうか。

多分、撃退される。

そうすれば、『ウチには関係無い』と言える。

「ふん」

「……神弥卿？　何か言いましたか？」

欺瞞だ。

後づけの理由なんかに大した意味は無い。どんなにそれが理にかなって聞こえても、それに頼ったら一番大切なものを見失う。理屈が立派になる代わりに、想いが中途半端になる。

そう――司は、ひよっとしたらついさっきまでの私自身も、大きな勘違いをしていた。

私は、シエルを助けに来たわけじゃない。

自分のやっтерることが誰かの助けになるなんて、そんなクソご立派な理由で戦っちゃいない。

「ラタスク卿。どいてください。行きます」

「ご協力に感謝します、神弥卿。できるなら、なるべく原形を残し

て無力化してください。敵性技術の貴重な資料です」

「ベストを尽くします。カウント・フォー・テイクオフ。スリー・マイナー」

私の宣言を一発で理解し、ラタトスクはモニターの前から消えた。直後に両脚のバーニアを噴かし、タラスクスは跳躍する。まずは接近して、何が起きたのか確認したい。歩いていくと不意打ちが怖いし、そうなった時に街に余計な被害が出る。

跳躍中にアンダー・カメラで着地点を確認する。何もいない。見えない敵？

広い通りに着地する。通行人も避難する人もいない。ラトの言葉は本当らしい。まだ日付も変わらない聖都の中枢だというのに、人気は無く、夜の闇が周囲を支配する。「さて」

「シエル！ 大丈夫！？」

…私の第一声これでいいのかな。まあ言ってしまったから仕方が無い。

通りの向こうに、ニーズヘグは倒れていた。さっきの攻撃からそこそこ時間が経っているはずなのに、何の動きも無い。パイロットが気絶しているのかも知れない。「シエル！」外部音声もオンにして、もう一度呼ぶ。

「…何だ？」

「…！」

その声はすぐ近くから聞こえたが、ともすれば聞き逃してしまいそうなほど小さな声だった。ラタトスクと話すためにオンにしたタラスクスの外部聴覚。

「お前、今何とほざいた？」

「ヤノシュ！」

タラスクスとニーズヘグのちょうど中間辺りに、剣を担いだヤノシュがいた。「不意打ちは騎士の流儀に反するんじゃない？」

「背中から狙撃しようとした奴の言う事か」

「冗談じゃない。確かに発射準備までは敵が背中向けてる間にやつ

たけど、その後はちゃんと名乗りを上げて戦ったんだから。適当な言いがかりつけんなよモーロクジジイ」

ふん、と不意打ちジジイは鼻を鳴らす。「口の悪いババアめ。まあいい。それよりお前、さっきのは何だ」

「何がよ」

「シエル！ の後だ」

「……」

「ヤノシユ！」

「そこじゃない！」

めずらしく、ヤノシユが叫んだ。「大丈夫か、とかほざいたろうが！」

「……ああ」

やっぱり、ダメだったらしい。「ほだされおつて。やる気が無いなら帰れ」ヤノシユは正面に——ニーズヘグに向き直る。「待ってよ、ヤノシユ」

「待たん。説明もせず利用した非もあるから、一番手柄はお前に譲ってもよかったが——気が変わった。戦意を失ったお前など役に立たん。俺の邪魔にならん位置で見物してろ」

ヤノシユが喋る間に、ニーズヘグが立ち上がる。ヤノシユの一撃は私も狙っていた右肩に、この距離でも分かる大きな刀傷を作っていた。白いコーキング液が傷口から噴出し、白い鮮血のようにニーズヘグの腕を染めている。これである腕は硬化して、もう使い物にならないだろう。

終わりかな、と思う。

もう勝負はついた。ヤノシユもそう感じているのか、どこかゆつたりと構えて「う」「？」

「ウアアアアア！」

「！？」

ニーズヘグが踏み込んできた。最大戦速。かわせない。「うわ！」両腕でガードし、一歩下がって踏み留——まろうとしたが、ダメだ

った。倒れたタラスクスはそのまま路面を削りながら滑る。「ま、まずいまずい！」とつさに身体を捻って肩から倒れたが、武器がいくつか馬鹿になってるかもしれない。ラックの信号と武器は独立してるから、FCSでは武器の細かい状態がわからない。実際に使ってみるまで、壊れているかどうかわからないのだ。

いや——そんなことより！「ど、どうしたの、シエル！」
「はあああ！」

裂帛の気合と共に振り下ろされるニーズヘグの腕。私は後方短距離回避を入力し、第一両腕に刀、右第二腕に槍を構える。シエルの声。でもまるでおかしい。攻撃に気を込めるための発声というのは、それだって常日頃の鍛錬が必要なのだ。でも、シエルのはそうじゃない。喉を嚔らして無理に叫んでる。小衣のように普段からやってるわけじゃない。無理してる。何で？

——薬物？

「シエル！ 聞こえる！？ シエル！」

「黙れ！ 黙れ黙れ！」

よし。黙れと言った。聞こえてるし理性もある。昂精神剤の類ではなさそうだ。だいたい打ってすぐこんなになるような薬物があつてたまるものか。するとなんで？ シエルは正気だ。でも叫んでる。怒るように。憎むように。

——無理して、演技してる？ だからなんで？

「……！」

「おおおおおお！」

シエルが叫び、また腕が飛んでくる。私は刀で弾いてその軌道を逸らし、返す刀を横薙ぎに振って牽制した。シエルが悔しげに叫ぶ意味のある単語を口にくることすら拒絶するように。

きつと——意味のある単語を言おうとしたら、どうでもいいことを口走ってしまいそうだから。

「馬鹿——シエルの馬鹿！ 馬鹿シエル！」
毒だ。

私に盛ったのと同じ毒を、自決用に持っていたのだ。勝負がついたのはシエルも分かっていた。だから持っていた毒を飲んで、残された時間を使って人生最後の反撃に出た。どうせ死ぬならと思えば覚悟も決まる。狂ったように叫ぶことしかないのは、誰よりも死の恐怖に怯える自分自身を騙すためだ。どうして私を狙うのかは分からない。目に付くところに居たからだろうか。

——私を殺して心中、みたいなことを思ってくれてるのだろうか。「それは無いか」

自嘲し、私はタラスクスの外部スピーカーの音量を最大にした。どうせ人はいないんだから、近所迷惑にはなるまい。

ちなみにジジイの鼓膜は心配しない。叫ぶ。

「司！ 解毒剤ここに持って来なさい！ 全速力！」

ふざけんなこのババア、どこかで司が言っている気がした。どうでもいい。私のやることは変わらない。私と同じ毒だなんて確証は無い。シエルの焦りようからして、使える時間は五分も無いだろう。その時間でニーズヘグを倒し、シエルを引っ張り出して司に解毒剤を打たせるのだ。

「行くよ、シエル！ 貴女が全力で戦うなら、私もその気持ちに全力で応える！ 覚悟しなさい！」

「黙れ！ 黙れ神弥！」

「絶対助けてあげるからね！」

宣言し、踏み込んだ。しかしスピードが乗り切らない。ニーズヘグは反撃の腕を振り上げる。

「なめんなあ！」

ナメちゃいないよ。

と言おうと思ったけど、舌を噛むのでやめた。

渾身の一撃がタラスクスを打ち据える。敢えて避けず、刀を構えた両腕を持ち上げてガードする。「っ！」コクピットが激しく揺れる。私の身体はハーネスでシートに固定されているはずなのに、壁が何かに頭をぶつけた。ふわりと浮き上がる意識を必死に繋ぎ止

め、バーニアを噴かす。「え!？」

シエルの驚く声は悲鳴に変わる。タラスクスは両腕でガードしていたが、被弾の瞬間、槍を持たない左第二腕でニーズヘグの右腕を掴んだのだ。そして殴られた衝撃と同時にバーニアを全開にした。するとどうなるのか。ニーズヘグの腕の強度が一定以上なら、腕は千切れずにニーズヘグが横方向に倒れこむ。一定以下なら「よおおし!」ニーズヘグの右腕は引き千切れ、タラスクスはそれを持ったまま低空を飛翔する。テイル・スピン。私は脚を振ってバーニアを噴かし、タラスクスを空中で逆さまにしてニーズヘグに振り向かせる。ニーズヘグの腕を棄て、左第二腕に短剣を構え、

投げた。「っ!」シエルが息を呑む。短剣は右腕を失ったニーズヘグの傷口に深々と突き立った。無敵の鎧を持つニーズヘグの唯一の弱点。鎧と腕を失い、白い血を流し続ける傷口。奴に決定的ダメージを与えられるとしたらそこしかない。小さな傷口を切り裂き押し広げ、無理矢理にでも中からシエルを摘出する。

投げた反動のままに宙返りして脚を下にし、タラスクスが着地する。ちょうどいいところに建物があったので、それを使わせてもらうことにする。「1、2、」1でタラスクスを片足で着地させ、2でその脚を軸足にして敵に振り返り、逆の脚を建物にかける。

「3!」

飛翔。Gが私の身体を押し潰し、相対距離が一瞬で0になる。潰れてる場合じゃない。桿を操作し、右第二腕の槍を振り上げる。これだけの速度が乗った槍を装甲が無い場所に食らえば、確実に内部を貫通する。メインバイパスを切れれば終わりだ。

衝撃。「っ……!」

意識が飛んでいたらしい。気がつくとタラスクスは地面に仰向けに倒れていた。雲の多い夜空にまばらに星が輝く。「ナメンなつて、言ったでしょ……!」シエルの声。ニーズヘグ必殺のメガトンパンチが、ついにタラスクスを捉えたらしい。あの速度に反応したのか。やっぱりシエルは只者じゃない。「……あ」そうだ武器。気絶し

ていたとはいえ、思いつ切り背中から倒れてしまった。刀と槍は手に持ってたから、背中にあるのは斧と弓矢——まあそんなに簡単に壊れるものでもないが、弓の弦ぐらいいは切れてるかもしれない。

それにしても、星が綺麗だ。「よし」

タラスクスを立ち上がらせる。あの星達に、今夜の勝利を誓おう。もし挫けそうになったら、この星空を思い出そう。——別に急に口マンチツクに目覚めたわけじゃない。目的意識の問題だ。

これが終わったら、シエルと二人であの星空を見よう。「そう、それだ。君はそれでいいんだ」

「……久し振り」

「お互いに忙しかったからな。しかし、私の声が聞こえるようになったというのは、君の心に余裕が出来た証でもある。良い兆候だ」「医者か」

「お祝いに、一つ助言を差し上げよう。——彼女が君の右頬を打つたなら、君は彼女に自らの左頬を差し出さない」

「やだよ」

「常にそうしろということではない。神という概念から君達は誤解しがちだが、私の言葉は全て普遍的な価値を持つものではない。私は君達一人一人に最適な言葉で、君達がその時置かれている状況に對して最も効果的な助言を送っている。今回もそうだ。いつか私の言葉の意味が分かる時が来る。そしてそのいつかは、比較的すぐだ」「今回はえらく協力的ね。なんで？」

「一つには先程言った通り、君が他者との友愛に目覚めたことへのお祝いだ。——いささかインモラルなのが気にかかるが」

「余計なお世話」

「そしてもう一つには——もう、君に残された時間が長くないからだ」

「——え？」

思わず聞き返した瞬間、衝撃を感じた。「……！」意識を引き戻す。戦闘中だった。

殴られて倒れこむタラスクスの脚のバーニアを噴かし、左第二腕を地面に突かせる。殴られたベクトルをさらに増速し、左腕で反動をつけてタラスクスは跳び上がり、脚を傾けて重心を移動し宙返りする。華麗に着地——するとみせかけて低空飛行で急襲とかどうだろう。急所を狙った攻撃でない以上決定打は望めないが、敵の意表を突いて隙を作らせるという意味では次に繋がる有効な一手のはずだ。よし採用。着地する寸前に結論を出す。

「——あれ!？」

驚きの声を上げた時には、私はもうスロットルを押してしまっていた。

ニーズヘグが、いない。

原因を頭が理解する前に、身体が反応した。テイル・スピン。ニーズヘグの腕を寸前でかざした腕で受け止め「っ!」きれなかった。タラスクスの腕が跳ね上がり、きりもみしながら墜落する。ぐはっとかがはっとか、そんな漫画みたいな声は上げられなかった。

声の代わりに、私の喉は血を吐いた。「……!」痛みよりも驚きで、私は呆然と自分の吐いた血の紅を眺めた。「……ああ」そうか。効いてなかったんだ。解毒剤。

考えてみれば当たり前だ。この世の全ての毒に効く万能薬なんてあるはず無い。目盲滅法で打った薬なんて効くはず無いのだ。死んで当然の私の身体が人より長く保ったのは、もともと私が延命処置を施された強化人間だから。でもそれももう長くない。

長かった旅が、終わろうとしている。「……そうだ」

「このまま彼女を救えずに君の命が尽きれば、君の魂は闇に閉ざされてしまうだろう。そうなれば私の声を聞くことも、聞こうとする事も無くなるだろう。私は君というかけがえの無い友人を失いたくない。だから、最後ぐらいは力を貸してもいいと思ったださ」

「——」

最後——こいつの言う最後とは、本当に最期なのだろう。シエルにも会えず、ママの仇も取れず、命と心を引き換えにして擦り切れ

るまで戦い、最期は服毒の苦痛に翻弄されて力尽きる絶望の末路。確かにそうなったら私は、もうこの世界に何の希望も持たないだろう。魂が闇に閉ざされて——どうなるんだろう。その後。そんなの知らない。死んだ事無いのに知るはずが無い。そうやって死んだら、その後どうなるの？

——怖い。「凄い……」

「……さすがです、神弥卿。まさかあの速度で反応するなんて」

「……シエルのがすごいよ……」

口元を拭きながら、笑う。私はただやばそうだと思ったから身体を捻っただけだ。シエルは私の奇襲を予期して回避し、さらにサイドからの逆襲に転じた。それはシエルの先読みと作戦立案能力があつてこそだ。ニーズヘグの機動性はその次ぐらしい理由でしかない。

……？　ちよつと待て。ニーズヘグの機動性？　「……あれ」

形が変わつてる。

片腕は私が落としたが、もう片方の腕も無くなっている。巨体を支えていた両脚は大幅に細くなり、今は太さの変わっていない尾の方で体重を支えている。最も頑強そうだった胸部装甲もパージされ、背中で折り畳まれていた二枚の翼が広がる。翼持つ悪しき黒竜、大地と樹の破壊者。ニーズヘグ。「……シエル」「はい？」

「次で、終わりにしようか」

「いいんですかそんなこととして。神弥卿、まだこの状態のニーズヘグは初見じゃないですか。そんな状態で勝負かけていいんですか」

「とんでもない。私からしたらここが最大のチャンスよ。だってようやくあのクソ固い鎧を棄ててくれたんだもの。あとは市井のメイドさんごときが、私の怒涛の連続攻撃をどこまで捌き切れるか見物だわ」

「ふふ」

「？　何？　笑った？」

「語るに落ちましたね神弥卿。私に降伏ではなく決着を迫るのは、貴女自身にこれ以上の戦闘を続けるだけの余裕が無いから。なら私

は貴女の攻撃を適当にかわして、貴女が音を上げるのを待てばいい。残り時間は神弥卿の方が少ないはずです」

「……」

やっぱりすごい。さすがシエルだ。ますます欲しくなった。スコルピア連邦陸軍特務機関なんちゃら、だっけ。

いつか叩き潰してやる。

「……ママ」

右に刀、左に斧、右第二腕に槍。タラスクスを構えさせ、呟く。ママを呼ぶのはこれで最後だ。いつか全ての竜を滅ぼしたら、全てを投げ出してママに会いに行こうと思っていた。でもそれはもうできない。きつとこれからの数十秒が、私に残された最後の時間。私はそれを、ママのために使わない。

結局、出来なかった。復讐という大義を傘に着て、ママの名を免罪符に使い、憎悪を勇氣にすり替えて破壊と闘争に明け暮れて——それでも、出来なかった。

出来なかったけど——

「ごめんね、ママ。もう私、ママには顔向けできないけど——でも、たとえ地獄に落ちてても、ママのこと忘れないから」

「戦闘中にママとか恋人の名前を呼ぶのは、半人前だって言いません？」

「言わないね。だってそれは希望の名前だもの。絶望に立ち向かう人が、自分の心に希望を灯すために唱える、神様の名前だもの」
「そんなものに頼るのが半人前だって意見もあるそうですよ？」

「じゃあ、貴女にも教えてあげる。私のママがどんなに素晴らしい人だったか。その人を知っているだけで、どんなに世界が明るくなるか」

落ちた地獄で、教えてあげる。

そう——どんな結果になるか分からないけど、私一人では、死なない。

「——」

込み上げてきた酸っぱい鉄の味を飲み込み――疾った。金属音を残し、タラスクスが風となる。

ニーズヘグもほぼ同時に走った。体勢が低い。スプリンターで疾走するタラスクスよりもさらに低い。身体を地面に横たえ、蛇のようにジグザグに滑走する。極端に低い姿勢と蛇行機動は敵に的を絞らせない。私は攻撃態勢のまま、何のひねりも無く前進した。どうせこつちから仕掛けても当たらないのは分かってる。だったら先手は譲ってやる。敵が移動から攻撃に転じ体勢が変わった瞬間、全腕一斉攻撃を叩き込む。

相対距離が0になり、ニーズヘグの上体がわずかに上がる。「シエル！」叫び、刀を振り下ろす。

金属音が耳を裂く。「え!？」

ニーズヘグが消えた。刀は地面に突き立っている。「これがニーズヘグの『砲』、C S P ―《空間密閉圧縮砲》!」「!」後方モニター。刀を引き抜いている暇は無い。タラスクスは刀から手を離し、身体を捻って後ろから降ってきたニーズヘグの大剣を裏拳で逸らした。翼のように見えたものは、タラスクスの背丈ほどもある折畳式対艦刀だった。そして『砲』。敵は地中を掘削していたのではなく、侵攻ルートの空間を密閉・圧縮し、負の属性を持った空間の中を歩いてきたのだ。広範囲では使えないようだが、それはこうして戦術的にも運用できる。

「まずい!」「遅い!」

シエルが私と同時に叫ぶ。シエルは私の動きを読んでいた。ニーズヘグは両手に持った大剣の、左だけをまず振り下ろしたのだ。タラスクスの裏拳はそれを防ぐことには成功したが、結果敵が振り上げた右の大剣に対し、無防備に身体を開く形となった。

避けられない。やられる。

「ああっ!」「止める、タラスクス!」

激しい衝撃がコクピットを揺らす。横薙ぎに襲い掛かるニーズヘグの大剣は、見事にタラスクスの胸下部を捉えた。私に出来たのは

左腕を防御位置に動かすぐらいだったが、それでも闇雲に回避するよりは長生きできたと思う。左第一腕の信号途絶。メインバイパス損傷。腕と斧を失った。出力が落ち、タラスクスが力を失っていく。コンソールの灯のいくつかが消える。「まだよ！」願った。まだ保たせて、タラスクス。私は敵の大剣を防げはしなかったが、その代わりに攻撃の手を打った。槍を右から左第二腕に持ち替え、敵の肩口に突き立てたのだ。斬られた勢いでタラスクスを振り、返す。ボディブローを叩き込み、槍をさらに捻り、押し込む。「ぐ……！」ボディブローは一見無意味な攻撃に見えるが、それはニーズヘグではなくシエルを狙った攻撃だ。シエルは頭はいいが竜と戦うのは初めてだ。予想外のタイミングでダイレクトな衝撃を受ければ、状況把握のために一瞬注意を拡散させるだろう。それで反応が遅れる。私は右第二腕で槍を持ち、左第二腕はニーズヘグの右腕を持ち、脚のバーニアを全開にしてタラスクスを回転ジャンプさせた。

「ああっ!？」

思わず悲鳴を上げる。ニーズヘグの右腕を引き千切ることはできたが、その代わり戻ってきた左の大剣に脚を切られた。ベクトルが狂い、タラスクスはきりもみしながら宙を流れる。墜落。タラスクスはまた地面に倒れた。脚を失ったから体勢は立て直しようが無いが、だいぶ飛ばされたから考える時間は

——間違えた。無い！

「終わりです！」

ニーズヘグが一瞬で移動してくる。左の大剣を逆手に持ち替え、突き下ろす。まだ片脚残ってる。脚のバーニアを全開にしてニーズヘグを蹴れば、剣の打点をずらせる。あわよくば転がせるかもしれない。それから——ダメだ。後が続かない。だったら——

彼女が貴女の右頬を打ったなら、貴女は——

「……ちえ」

舌打ちした瞬間、ニーズヘグの大剣がタラスクスに突き立った。コクピットがひしゃげ、構造物が私の身体に突き刺さる。声と共に

血を吐き出し、私の身体から力が抜ける。「…あ…！」シエルの声。衝撃。ニーズヘグが倒れたのだろう。ニーズヘグの左第二腕が千切ったニーズヘグの右腕から剣を奪い、突き返したのだ。間に合っただろう。一瞬でも遅れていたら、それすらできなかっただろう。

——何がよかったなのか。「ふん…」笑うしか出来ない。痛みもそうだが、それ以上に失血が酷い。動こうと思っても身体が言うことを聞かない。病は気からなんて嘘だ。死ぬ時は死ぬんだ。何も出来ずに。ただ。「…」目を閉じる。

「——寝てしまうのか？」
「！？」

声は、今までよりはつきりと聞こえた。「驚いた…今回はほんとに、手え貸してくれるんだ？」

「手は貸してない。私はただ語りかけるだけだ。——で、寝てしまふのか？」

「——冗談」

「それでこそだ。さあ行こう。君の最後の役目を——いや、望みを果たしに行こう」

その声を肯定する気は無かったが、私は手を少しずつ動かし、身体に刺さったコクピットの破片を外し始めた。

どうせ寝るなら、シエルと一緒にいい。

+

もうほとんど動かない身体を引きずり、コクピットの隙間から這い出した。ニーズヘグは、タラスクスに折り重なるようにして倒れ

ている。「…」

名前を呼ぶ体力も惜しくて、私はただ歩いた。歩き、倒れ、這いずり、四つん這いになり、また歩く。

意外と長い戦いだったのか、それとも私の歩みがのろいせいか、ニーズヘグのコクピットに辿り着く頃には周囲は明るくなっていた。天から降り注ぐ光が、周囲に満ちている。

どうやってコクピットハッチを開けたか、憶えていない。「…シエル」

「…神弥、卿」

シエルは血塗れでコクピットに座っていた。目だけを動かして、呆然と私を見る。その血が何処から出たものかは聞くまでも無い。タラスクスのコクピットとニーズヘグのコクピットじゃ、損傷度が全然違う。

——シエルも、辛かったんだ。

倒れ込むようにして、コクピットに入る。「っ」「ごめん…脚がバカになってて」「…私事です」笑う。

「…シエル」

「はい？」

「ごめんね」

肩を抱く。寒い。シエルの体温が欲しい。「私がもっと強かったら、貴女を助けられたのに——」

こんな形にしか出来なかった。説得するだけの語彙も時間も私には無かったし、何か違うと思った。それじゃここまで来たシエルの苦勞に応えたことにならない。

「——いいです、そんなの」

「ごめんね——もう間に合わないよね——」

「…間に合ってますよ」

「え…？」

横目でシエルを見る。間近で目が合った。「だって、ここまで来てくれたじゃないですか」

「――」
目を逸らす体力も無かったが、逸らしたかった。――ほらやっぱ
り。救われたのはシエルじゃなかった。一度ならず二度までも。戦
闘でも相打ちだったし。

きっと私はずっと――この先、永遠に、シエルには敵わない
だろう。「…神弥卿」「何」

「…大好きです」

「…うん」

「…あれ。私も、とか言ってくれないんですか」
「…」

答える代わりに、抱き締める。思いっきり。私に残った命の全
てで。

天国なんか、行けなくていい。

シエルがいるここ以上の樂園なんて、あるはずが無い――

+

最後の装甲版を引き剥がした。「朝！」

全ての外装を外しても、香禽司の目にはまだ朝の姿は映らなかった。潰れたコクピットと構造物の破片に埋もれてほとんど見えな
い。「クソ、まだあのかよ……！」吐き棄て、手近なところから壊
しにかかる。くそ。タラスクスめ。ややこしい壊れ方しやがって。

「——おい、もういいだろう。じきにラタトスクの救護班が来る」

「ああ！？ 何がいいんだ！？ ボケたかジジイ！」

「そんなことをして、神弥を助けられると思っっているのか？」

「勝手に諦めてろ！ あと諦めんだったら邪魔だから黙れ！」

「そうじゃない。——もう楽にしてやれと言っている」

「ああ！？」

振り返る。ヤノシユ。「神弥はもう充分戦った。これ以上無理をさせるな。普通に生きていれば、もうとつくに死んでいる年だ。女のみで年恰好の頃から、ずっと——ここで死ぬなら、その方が幸せかも知れん」

「ふざけんな！ だったらそれをどうしてもっと早く言つてやらなかつた！？ 無鉄砲なこいつのことだ、今までだつて死にそうになつたり、くだらない理由で命や戦いを放り出そうとした事だつてあつたんだろ！？ どうしてその時死なせてやらなかつた！？ どうしてこんな年端もいかない女が戦場に出てきた時止めなかつた！？ どうして本当は戦いたくないこいつの声を聞いてやらなかつた！？ どうして今まで生かしておいた！？ どうしてこいつが生まれ た時さつさと殺してやらなかつた！？ 今の今まで見殺しにしてきたのはお前らだろうが！ 戦争が終わつて余裕ができたから煙草ふかしながら人道論か！？ 寝言言いてえなら帰つてクソして寝ろやこの糞垂れジジイ！」

言つて、もとはタラスクスだつた瓦礫の山に向き直る。「——こいつの延命を望むのが、人間のエゴだつて言うなら」

「俺が、全ての人間のエゴを背負つてやる。神弥朝を生かし、修理し、醜い姿にしてまで生きながらえさせ、今また戦いに駆り出しているクソ外道はいかにもこの俺様だと、世界中に触れ回つてやる。ざまあみやがれ知識人ども！」

「——」
瓦礫をかき分け、朝の身体を引きずり出す。「待つてろ、朝、すぐに医者が来るからな。それまで死ぬな——」

「——」
「！？ 朝！？」

「し——し、える——」

「……」

聴いた瞬間、司の動きが止まり——「——ああクソ！」

「わかつたよ！ 助けりゃいいんだな！ 後悔すんなよこのバカ！」

怒鳴り、手つきだけは丁寧に朝の身体を下ろし、司はニーズヘグに向かう。「…お」

ヤノシユが、剣でニーズヘグの装甲を剥がしているところだった。「——おいジジイ。わかってんだろうな」

「ふん。この残骸が手に入れば、ラトも女には用はあるまい。尋問したところで吐かんのはいつが一番よく知っておるだろうしな。好きにするがいい」

「…悪いな。さっきは言い過ぎた」

「気にするな。後で何か言われても面白くない。俺はこの場になかったことにする。お前は空気に向かって分不相応な持論をまくし立てていただけだ」

「…やっぱクソジジイだな」

夜はまだ明けない。朝の戦いは終わり、また別の誰かが戦っている。その結果はまだ誰にも分からない。朝が再び目醒めるかどうか、まだ誰にも分からない。

きっと、神ですら分からない。

？・もしもあなたが愛する人に打たれたら（後書き）

というわけで第三話Bパートです。

ここまでで一区切りです。ご読了ありがとうございました。

感想等ありましたらお寄せください。

次回からは新番組が始まります——というか、まとまった量が書けたらアップするので、しばらく後になります。

心機一転現代劇ロボットだったり、ガンダムSSだったりするかもしれません。

それではしばしお別れです。皆様どうかいい夜を。

朝とシエルが隣同士の病院のベッドでいちゃついてることを祈りつつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8799p/>

タラスクス～朝の病名～? - 2

2011年10月8日13時07分発行